

長崎県北松浦郡鷹島周辺海底に眠る 元寇関連遺跡・遺物の把握と解明

Grasping and Analyzing Mongolian-Expedition-Related
Archaeological Sites and Remains on the Seabed of Takashima

池田 栄史 (Ikeda Yoshifumi)
琉球大学・法文学部・教授



研究の概要

長崎県北松浦郡鷹島周辺海域は元寇の際に、暴風雨を避けて避難した元軍と高麗軍の軍船が遭難した海域として知られる。本研究では鷹島を含む伊万里湾全域において、物理学的手法を用いた海底探査と水中考古学的調査手法の融合を図った調査・研究を行ない、新たな元寇研究および水中考古学研究方法の確立を試みる。

研 究 分 野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キ ー ワ ー ド：元寇・鷹島海底遺跡・水中考古学・海底探査

1. 研究開始当初の背景

鷹島周辺の海域では、漁業者の手によって海中から陶磁器をはじめとする遺物が得られていたことから、ここが元寇の際に元軍の軍船が沈没した場所とされてきた。このため鷹島の南海岸沖合い 200m の範囲は「周知の遺跡」とされ、この地域での港湾工事に際しては考古学的な調査を実施することが定められている。

しかしながら、鷹島周辺の海底遺跡の広がりやその内容については、総合的な調査が行なわれたことはない。

2. 研究の目的

これまで、鷹島南海岸では、港湾整備に伴う緊急発掘調査をはじめとして、数次にわたる水中考古学的調査が行なわれている。

これに対して、本研究では鷹島を含む伊万里湾全域を調査対象地とし、海底地形図および地質図を作成することによって、元寇遺跡の実態を明らかにする。

また、海底探査手法と水中考古学手法の融合を図り、新たな水中考古学研究システムの構築を試みる。

3. 研究の方法

本研究に海洋調査で用いられる超音波探査装置や DGPS システムを導入して、海底地形および地質調査を実施するとともに、元寇遺物の分布状況を把握する。

これまでに散発的に得られてきた元寇関連遺物について、系統だった考古学的資料整理を行ない、その内容を把握する。

中国・韓国・日本における元寇関連資料のデータベースを作成する。

4. これまでの成果

本研究では、探査班、考古作業班、海外調査班(文献史学)、同(考古)の研究班を設け、それぞれも研究の深化を図りつつある。

・探査班

平成 20 年度までの探査によって、伊万里湾の約 80% について、地形および地質調査を終了し、異常反応の抽出(概査)を終えた。異常反応に対しては、さらに精査を行なう。この概査と精査については、前年度の概査で検出した異常反応に対して、翌年度に精査を実施するという手順を踏んで実施している。

研究着手の段階では、異常反応については精査の段階で、素材や形状、大小の相違をはじめとした反応物の内容の相違が、比較的容易に判別できることを期待していた。しかし、平成 18・19 年度の精査では、魚礁や海底ケーブルなど、海底に露出した状態にある近年の堆積物の判別は容易にできたものの、堆積層中に埋もれた元寇遺物の具体的な内容の判別は、かなり難しいことが確認された。

このため、平成 20 年度の調査を開始するにあたって、はじめに海底堆積物の内容が明らかな北海道江差港に沈む旧江戸幕府軍艦「開陽丸」での探査実験を行なった。この結果、海底に堆積した銅製品ははっきりとした反応を見せるが、木材は極めて限られた周波数の音波にのみ反応することを確認した。

なお、ここに記載したこれまでの伊万里湾および北海道江差港沖開陽丸に関する海底探査成果については、平成 20 年度末に調査成果をとりまとめ、2 冊の報告書として刊行した。

・考古作業班

平成 20 年度までの作業によって、平成 13・14 年度鷹島海底遺跡緊急発掘調査出土資料中の約 600 点について考古学的資料化を終了した。この中で、鷹島海底遺跡出土資料中の船材については、長さや幅の点では個々の変化が激しいものの、厚さについては現在の約 3cm (ほぼ 1 寸) を単位としたまとまりがあることを明らかにした。このことは船材の準備や加工の際に、約 3cm を単位とする尺度が採用されていたことを示唆する。

また、出土遺物中の土製円球状製品については、宮内庁が保有する『蒙古襲来絵詞』に描かれている火薬を詰めた爆発弾である「てつはう」と考えられるが、実測作業を通して、その製作技法を復元した。

海底遺跡および遺物についての水中考古学的調査の実施および調査方法の検討については、物理探査班によって 8 つに類型化された伊万里湾海底の異常反応について、これを踏まえた内容物の確認試掘調査の方法を検討中である。

・海外調査班 (考古)

海外における元寇関連考古資料の調査については、中国と韓国の 2 カ国を中心とした情報の収集を進めるとともに、現地での調査を実施している。

まず、韓国では全羅南道木浦市に位置する国立海洋遺物展示館に収蔵展示されている 14 世紀前半の新安海底遺跡から検出された船舶とその積荷について資料調査を行なった。中国では沈没船と壺・甕などの貯蔵容器を中心とする陶器の類例調査を中心に実施した。この中で、沈没船については、福建省泉州市開元寺に保管、展示されている宋代の船舶について観察を行なった。本船舶の場合、船体の舷側を構成する板材の組み合わせが 3 枚重ねとなる点など、韓国新安船とは若干異なった技法を用いている。これらの船舶構造は、鷹島海底遺跡で検出された船材と考えられる木材片の使用部位を検討する上で、重要な比較材料となる。

・海外調査班 (文献史学)

海外における文献史学に関する資料調査は韓国高麗時代資料、中国宋・元代資料およびモンゴル文字で書かれた資料の調査を中心に実施している。中でも中国宋・元代資料については、『宋史』、『元史』、『金史』、その他、当時編集された文献に残る元寇関連記事を網羅的に集成しつつある。これまで、元寇に関する中国側の関連文献資料については、このような集成的研究はほとんどなされていない。本研究ではこれらのデータベースの作成を行なうとともに、日本国内で行なわれてきた元寇関連文献資料との比較検討を加えることとする。

5. 今後の計画

これまでの海底探査によって検出された伊万里湾海底面および海底堆積層中の異常反応の中で、海底表面に露出した状態で検出されている船舶と思われる反応の確認を行なう。この際、浅海域については潜水による視認を試み、さらに現地での図面・写真ナ殿資料化作業を行なう。水深 30m を超えるやや深海域の異常反応については、水中ロボットを用いた確認を行なう。

海底下の堆積層中に見られる異常反応についてはいくつかを選び、潜水によって現地でのボーリング調査を試みる。これと探査反応との対比を行なうとともに、内容物の素材や形状に対する検討を行なう。その後、必要に応じて、試掘調査を実施し、内容物の確認を行なう。

その上で、探査と水中考古学調査の融合実践を行ない、これからの調査研究システムへと昇華させることを試みる。

6. これまでの発表論文等 (受賞等も含む)

- (1) 佐伯弘次、日本侵攻以後の麗日関係、『蒙古の高麗・日本侵攻と韓日関係』、景仁文化社、ソウル、pp.260-274、2009
- (2) 池田榮史、考古学研究者による物理探査の模索、『最新の物理探査適用事例集』、pp.355—359、社団法人物理探査学会、2008
- (3) 池田榮史・根元謙次、「長崎県北松浦郡鷹島周辺海底に眠る元寇関連遺跡・遺物の把握と解明」(平成18年度～平成22年度科学研究費補助金基盤研究(S)研究成果報告書 第1集)、全146頁、2009
- (4) 根元謙次・池田榮史、「北海道江差町開陽丸音波探査報告」(平成18年度～平成22年度科学研究費補助金基盤研究(S)研究成果報告書 第2集)(研究課題 長崎県北松浦郡鷹島周辺海域に眠る元寇関連遺跡・遺物の把握と解明)、全86頁、2009
- (5) 池田榮史「第3章 出土遺物について(4. 金属製品(青銅製品・鉄製品)、5. 漆製品、6. 木製品、8. 船材および木材)」『松浦市鷹島海底遺跡 平成13・14年度鷹島町神崎港改修工事に伴う緊急調査報告書』(松浦市文化財調査報告書 第2集)、pp.62-129、2008
- (6) 佐伯弘次、『日本史リブレット77 対馬と海峡の中世史』、山川出版社、p.106、2008
- (7) 大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎(編)、『中世都市博多を掘る』、海鳥社、p.255、2008
- (8) 佐伯弘次(編)『街道の日本史49 壱岐・対馬と松浦半島』、吉川弘文館、p.244、2006